

詩篇119篇65～72節

- 65 主よ。あなたは、みことばのとおり、あなたのしもべに良くしてくださいました。
- 66 よい分別と知識を私に教えてください。私はあなたの仰せを信じていますから。
- 67 苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。
- 68 あなたはいつくしみ深くあられ、いつくしみを施されます。どうか、あなたのおきてを私に教えてください。
- 69 高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めましたが、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。
- 70 彼らの心は脂肪のように鈍感です。しかし、私は、あなたのみおしえを喜んでいます。
- 71 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。
- 72 あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

טוֹב עֲשִׂיתָ עִם־עַבְדְּךָ יְהוָה כְּדִבְרֶךָ׃
 טוֹב טַעַם וְדַעַת לְמִדְּנִי כִי בְּמִצְוֹתֶיךָ׃
 טָרָם אֶעֱנֶנָּה אֲנִי שָׁגַג וְעַתָּה אִמְרָתֶךָ שְׁמַרְתִּי׃
 טוֹב־אֶתָּה וַיִּמְטִיב לְמִדְּנִי תְּקִיָּה׃
 טָפְלוּ עָלַי שָׁקֵר וְזִדִּים אֲנִי בְּכֹל־לֵב אֶצְרַפְקוּדֶיךָ׃
 טָפַשׁ כַּחֲלָב לִבִּי אֲנִי תוֹרַתֶךָ שְׁעֵשְׂשַׁעְתִּי׃
 טוֹב־לִי כִי־עֲנִיתִי לְמַעַן אֶלְמַד תְּקִיָּה׃
 טוֹב־לִי תוֹרַת־פִּיךָ מֵאֲלֹפִי זָהָב וְנֶכְסֶף׃

第九字「テース」。ヘブル語では「t」に相当する子音が二つあり、もう一つは最後の「タウ」ですが、どちらかという「テース」の方が鈍い響きを持ちます。今日の箇所にも多く出てくる単語「トーヴ」は、基本的に「良い」を意味する言葉で、頻出単語の一つです。

טוֹב／トーヴ…良い、楽しい、合意できる (65, 66, 68, 71, 72)

טָרָם／テレム…以前に、未だに、その前に (67)

טָפַל／ターファル…塗りつける、なすりつける、中傷する、べたべた塗る、貼り付ける (69)

טָפַשׁ／ターファシュ…無神経な、鈍感な、太った (70)

詩人は、主が良くしてくださいましたことを思い起こし、感謝をもって御言葉に従う決意を新たにしています。主はどのように良くしてくださいましたのでしょうか。文脈では「高ぶる者ども」(69節)による「偽り」(69節)に苦しめられたようですが、その苦しみを通して何かを教えてください。

さったということだと思われます。「**苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした**」(71 節) という有名な聖句は、すべての苦しむ人にとって慰めのことばとなるでしょう。しかしそれは、主の「**いつくしみ**」(68 節) にふれたときにこそ、その意味が変わるのです。事実は同じでありながら、当事者の中でまったく違う解釈が与えられるようになる。一生恨んだまま生きていく必要のない解放を主は備えてくださるのです。「**いつくしみ**」と訳されたことばもやはり「トーヴ」であり、主が良い方であるがゆえにご自身に依り頼む者をいつくしんでくださるとい希望が読み取れます。

ところで、「慈しむ」ということばは意外と日常使わないかもしれません。日本語の意味は「かわいがって、大事にする」とされていますが、例文として「我が子のように慈しむ」と書かれています。因みに、このことばは元々「うつくしむ」から来ているようで、母親が我が子を「なんて美しい授かりものだろう」と目を細める姿が思い浮かべられます。主のいつくしみはするように、信じる人々に向けられている。「いつくしむ」は「愛しむ」とも書くことがあり、まさに心から愛することを意味するのです。詩人はそのように、主の愛を感じ取っていたのでした。

「**分別と知識**」(66 節) とありますが、「分別」ということばは「味」「裁き」という意味で、私たちが舌で美味しいか不味いかを見極めるように、物事を神のことばを通して判断するというを表しているようです。常日頃から本物を食べているなら、偽物を口に入れたときに違和感を覚えるでしょう。いつも偽物ばかり食べていたら、見分けることができません。

「**苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました**」(67 節) と言っているように、詩人は苦しみを通して自分の過ちに気づいたのでした。何らか自分の犯した罪が自らの首を絞める結果をもたらしたのでしょう。これは誰も経験のあるところではないでしょうか。その刈り取りをしている時間の長さ苦しさは、当事者にしか分かりません。あんなことをしなければよかったと思うのです。しかし、主はそのような人間の失敗をも益に変えることがおできになります。苦しみを通してその人は練られ、整えられ、へりくだるようになるのです。失敗をしたからこそ、数十年後に良き助言者となれることもあります。

反対に、悔い改めない者(高ぶる者)については、「**彼らの心は脂肪のように鈍感です**」(70 節) と言われます。これは比喩ではありますが、「心」にも脂肪はつくようで、その生活習慣によって要らないものが付いていくように、心も鍛錬していなくてはしまりがなくなっていくのかもしれない。ここで言う「鍛錬」とは、自己啓発や修行というより、霊的に敏感であるかどうかということです。罪に対して自己を許容し続けている状態を「鈍感」と言います。主が自分の行動をどう見ておられるかに常に気を配って生きるならば、その人の心はシャープであり続けるでしょう。

最後に、珠玉の名句「**あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです**」をもって締め括りましょう。「金銀」とは価値のある貴金属と見なされていますが、それを「価値あるもの」と定めたのは人間です。お金もそうですが、元々価値のなかったものに価値が与えられたにすぎず、大衆の信用によって大きく揺れ動くものです。しかし、主の御言葉、「御口のおしえ」には絶対的な価値があり、どの時代、どの場所にあっても変わることがありません。詩人はそのことをよく知っていました。

昨今のインフレは、お金よりもモノの方が価値が高くなってきていることを表しています。逆を言えば、人々はお金に対して価値を見出さなくなりつつあるのです。では、モノすら手に入らなくなる世界がやってきたとしたらどうでしょうか。私たちはそのとき何に価値を見出すようになるか。最後に残るものとは何であるかを、もう一度この心に問いかけてみたいと思います。